

# 人と文学にひたる喜び： 『范成大詩選』

三野豊浩\*著、幻冬舎メディアコンサルティング、2018年

萩原正樹†

中国の正統的な文学は詩であり、それらは基本的に文人官僚によって制作された。時代や作者の個性、文学観の違いなどによって、詩風は千差万別であるが、詩の文学を主に担った階層については、長い中国の歴史の中でほとんど変わることはなかった。官僚たちが作った詩であるので、そこには官界での交際や、役人生活の感慨、出世や左遷の喜びと悲しみ、政治的な志や人民の生活への視点などが描かれ、また知人との親交や別れ、季節ごとの行事や自然に触れての感懐など、知識人としての日常を切り取った作品も多く残されている。詩はいわば文人官僚の生活の一部であり、中国の他の文学ジャンルに比べると、より密接に作者の日常生活とつながっているとと言えるであろう。詩を読むことは、その作者の履歴や精神生活を知ることであり、また作者の経歴や思想を知ることが、詩の理解におおいに役立つ、こうした連環が、特に中国の詩においては顕著なのである。

詩人と作品を理解するために、研究者は当然その全作品を読解し、また作者の伝記や時代背景、周辺人物の考証などを行うのであるが、日本の一般の読者はもちろん、専門家であっても研究対象以外の各詩人についてそのような作業を行うことは相当困難なことである。そんな時に役立つのが、詩人の主要な作品を訳出して、その作品の背景や作者の生涯などの解説を付した「詩選」の書物である。

日本ではこれまで、『中国詩人選集』（岩波書店）、『漢詩大系』（集英社）、『中国名詩鑑賞』（小沢書店）など、多くの「詩選」が出版され、それぞれ好評を博してきたが、このたびまた新たな「詩選」が加わった。それが三野豊浩氏著の『范成大詩選』である。

范成大（1126–1193）は、中国南宋時代の官僚で、南宋四大家の一人に数えられる詩人であり、日本でも江戸時代にはその詩集の和刻本が刊行されるなど広く知られている人物であるが、近代以降にその詩を一冊にまとめて紹介する書物は刊行されていなかった。本書は帯に「初の邦訳詩集」と銘打つ通り、范成大個人の「詩選」としては初のものであり、范成達の詩を好ましく思う者の一人としてその刊行を喜びたい。

本書は、范成達の詩 58 首を制作年代順に収め、范成達の生涯を五期に分ける周汝昌『范成大詩選』の説に従って、以下の全五章に排列する。

---

\* 愛知大学文学部教授

† 立命館大学文学部教授

hagiwara@lt.ritsumei.ac.jp

- 第一章 若き日の思い 青年時代
- 第二章 仕官の道へ 徽州時代
- 第三章 都での日々 首都勤務時代
- 第四章 旅から旅へ 地方長官歴任時代
- 第五章 隠棲と療養 晩年

本書を冒頭から読んでいくことによって、范成大の生涯を通覧できる仕組みとなっている。著者の言葉を借りれば、「范成大の人生は、それほど劇的なものではない。金に臨時の使者として赴いたことを除けば特筆すべきドラマがそれほどあるわけではなく、どちらかといえば地味な存在で」あった。范成大は、14歳で母を、18歳で父を失うという不幸に見舞われ、青年期には五人兄弟の長男として一家を支えるという苦労があったが、仕官、中央官庁勤務、地方長官歴任、隠退と、極端な浮き沈みのない、おおむね平穏な生涯を送っている。

だが波瀾万丈で、ドラマティックな生涯を送る人はむしろ稀であり、多くの人々は地味に日常生活を続けるものであろう。ただ地味な生活の中にもそれなりの哀歓や感懐がある。それらを詠じた范成大の詩について、筆者は「その詩風の特徴は、一言でいえば温和で含蓄に富むことである。一見平静そのもののようでありながら、実は深い味わいが隠されている。(中略)読み込むにつれ、じわりと作者の人柄がにじみ出て来るような佳作が少なくない」と述べておられるが、非常に妥当な評価と言えるであろう。

范成大には「四時田園雜興六十首」という農民の生活や田園風景を詠った連作があり、そのことから「田園詩人」と称されることが多い。「四時田園雜興」には趣深い作品が揃っており、評者もその愛読者の一人であるが、本書では「四時田園雜興」からは四首を選ぶのみに留め、その他の作品、「一般の人々の生活をうたう詩、政治的な抱負や感慨をうたう詩、役人生活の哀歓をうたう詩、赴任の旅の途中の情景や感慨をうたう詩、友人たちとの応酬の詩、肉親の情愛をうたう詩、日常の雑感をうたう詩、花をうたう詩、名所旧跡をうたう詩、歴史懐古の詩など」がバランス良く選録されており、范成大の詩の世界全体をうかがうことができる。評者も、嫁いだ妹との再会と別れを詠じた「周徳万携孥赴龍舒法曹、道過水陽相見、留別女弟（周徳万孥を携えて龍舒の法曹に赴き、道に水陽を過ぎりて相見え、女弟に留別す）」詩や、知人からの手紙に複雑な思いを詠ずる「喜収知旧書、復畏答、書二絶（知旧の書を収むるを喜ぶも、復た答うるを畏れ、二絶を書す）」などにこれまでの范成大のイメージとは別の面があることを知り、おおいに蒙を啓かれた。

各章の冒頭には必ず時代の状況や范成大の生涯についての解説が付され、作品の直前にも必要に応じて制作背景などが説かれており、作品の理解を助けてくれる。作品は、原文とその下部に訓読文を排し、その後に簡にして要を得た注を付し、さらに流暢な現代語訳が加えられている。訓読は、変に崩さないオーソドックスなもので、著者の高い学識を示している。ただ以下は、こうも訓めるのではないかと評者が感じたもので、18頁「秋日二絶」の第三句「江山を把りて」は「江山を把て」、29頁「姑悪」詩の第七句「人の与に」は「人と」、74頁「頃自吏部郎去国……（頃に吏部郎より国を去り……）」詩の末句「肯んずるや 来たりて相対し」は『詩経・邶風』の「終風」に「惠然肯来」とあるのを踏まえているととり「肯えて来たりて相対し」、101頁「冬至日銅壺閣落成（冬至の日 銅壺閣 落成す）」詩の第一句「人間を走ること徧く」は「走ること人間に徧く」とそれぞれ訓めないだろうか。著者のお教えを乞いたい。

原文、訓読文、注、現代語訳のほかに、本書ではさらに范成大の詩に親しんでもらう工夫として、著者による七五調の自由訳が添えられている。たとえば故郷に帰ったときの思いをうたった「初帰石湖（初めて石湖に帰る）」詩には、

やっとかえれたふるさとの・なつかしいみちあしまかせ  
てずからうえたやなぎのき・みどりのえだにせみがなく

という訳が付され、詩意を簡潔に分かりやすく味わうことができる。また本書は全体にわたって多くの漢字にルビが施されており、この点からも、「一般の読者の方にも面白く読んでいただければ」（本書「読者のみなさんへ）」との思いが感じられる。

詩の解釈の後には著者による解説が続くが、この解説がまたよく工夫されている。解説では、ほぼ毎回到わたって、良き先輩や友人であった同時代の周必大や陸游、楊万里らの動向を記して、范成大の立場や地理的な位置等を浮かび上がらせ、また「あまり知られていないが、范成大は六言絶句を百首余りも残しており」（129頁）、「家の前を通り過ぎる物売りの呼び声は晩年の范成大の重要な関心事であった」（133頁）、「范成大の詩にはよく『隣翁』が登場する」（142頁）など、范成大の文学の本質に触れるようなことをさりげなく指摘されていて、更なる味読や研究のヒントを我々に示してくれるのである。

本書は、三野豊浩氏という名ガイドの案内によって、詩人の生きた時代や実生活と作品世界とを堪能することのできる楽しいツアーであり、寡黙で地味ではあるが、実直で優しい范成大の人柄と文学にどっぷりとひたる喜びを存分に味わわせてくれる好著である。

ただ読み終わってみると、范成大の詩全1900首余りのうち、58首だけというのはやはり物足りなく感じる。実は当初の完成原稿では72首を収録していたそうであるが、その後出版にあたって14首を削除されたとのことで、その14首に4首を加えた18首の訳注を、著者は「『范成大詩選』拾遺」として愛知大学語学教育研究室『言語と文化』第41号（2019年7月）に発表されている。さらなる増補を経て、近い将来に『続范成大詩選』が上梓されることを願ってやまない。